現地通信

ジャワ島の調査旅行から

吉　井　良　三

跳虫という，昆虫のなかでも特に下等で，まだ翅のない群が私の年来手がけてきた対象物である。それを中心にして，東南アジアの生物と取り組んでみたいという漠然とした気持が学生時代からあった。戦前に機会があって，シンガポール，コロンボなどで資料を得，また南極に行くときには，その機会も利用し，熱帯湿潤地については，かなりはっきりしたものはあったが，さて本格的に東南アジアとなると，私もいささかとまどいした。とりあえず，できるだけ広く全地域を概観してみよう。それから個々の重点に，インテンシブな調査を行ないたい。そのような意図で，1965年の春には，フィリピン，ジャワ (Djawa)，マレー，タイを旅行させていただいた。その経験によって，私の調査については，雨期が望ましいこと，特に交通の困難さを考えると，雨期明けをねらうこと，それから，東南アジアといっても，ローカルな要素が多くて，マレーとフィリピンとでは，アプローチのやり方にも，たいへん差違があることがわかった。

文献についてみると，東南アジアの各地から，既に知られている種類がある。それを仕分けると表1のようなものが出来た。これはもちろん大まかな数字である。これについてみると，ジャワ，スマトラ (Sematera) が他より群をぬいてよく知られている。しかし，その数字は日本の⅓にすぎない。生物の分布の通例として，その種類数は熱帯に近づくに従って増加するので，これを，かりに日本の2倍とすると，全体の⅙あまりが知られていることになる。それならば，東南アジアのどこを手がけてもいいではないか。ただ，全地域を広範囲に調べることと共に，ある地域をかぎって，そこに重点をおくことが望ましい。そこで，第2次の調査としては，未だ全く報告のないところ，Terra incognita にするか，あるいは逆に，すでに知識の集積されているところから出発するか，であった。私は第2の方法をとり，ジャワ本島から始めることとした。幸いにして，春の旅行の途次，ボゴール植物園長スマルオトその他の人々とも旧知になっている。大使館の方々にも調査の要領は了解が得られているので，その点は心強い。センターの農村調査の一環として酒井敏明君が参加することとなり，また，おなじ土壌生物の調査で，タイ，マレーの経験のある今立源太良君を同行することで，万端の手配をととのえた。ビザ申請に先立って，思いがけずインドネシアの教育省から，Invitation letter がまい込んだ。春の旅行のとき，そんな話をしておいたが，政情不安のときでもあり，あまり頼りにはしていなかったので，これはたいへん有難かった。それにもまして幸いなことは，ウィーン大学 Prof. Kühnelt からの申入れであった。この教室は土壌生物の研究では重要な地位をしめている。その教室員のひとりが，先年，ジャワに住みついて，熱帯林の仕事をしている。そのときの跳虫の

表1　東南アジアにおける跳虫の既知種数（1940年現在）

地名	既知種概数	報文数
ベトナム	80	3
カンボジア	0	0
ラオス	0	0
タイ	20	1
マレー	40	6
ビルマ	5	3
フィリピン	20	2
ボルネオ	12	1
ジャワ・スマトラ	100	13
モルッカ群島	4	3
西イリアン	5	1
ホンコン	1	1
台湾	25	5
中国大陸	47	6
日本	320	30以上

資料を，そっくり送って来られた。これを私の調査資料にプラスすれば，東南アジアの第1の地点，ジャワは片がつく。

例のごとく，旅券とビザでギリギリの日限りになり，羽田からとび立つ。

7月12日，クマジョラン(Kemajoran)空港の人ごみのなかで，手続きはフリーパスに近かった。甲斐参事官のお迎えもあったためと思うが，まずまず第1関門を通過，華僑や他の外国人は，それほど簡単には通っていなかったように見うけられた。教育省の Invitation letter も，かなり光ったらしい。とにかく Hotel Indonesia におちつく。ジャカルタ（Djakarta）の町のなかにあって特別の地区であるこのホテルは，外貨でしか支払が利かない〝長崎の出島〟である。ルピアは4カ月以前とくらべると，更に下落していて，法外なものになっている。ジャカルタにいるかぎりは，このホテルに居なければならないので，部屋代はケチれないが，外食をすることにして，それでかなりの節約になる。先ずは恒例にしたがって，中央官庁との折衝からはじめねばならない。

インドネシアで何かの仕事をしようとするとき，専用の自動車を持つことは，最小限の要求である。官庁の執務時間は午前中だけ，それも上級の責任者ともなれば，10時以後でなければ顔を出さない。アポイントメントがあっても，臨時の閣議もある。日曜日のほかに金曜日もおやすみ。祭日も多い。つまり10時～12時のゴールデンアワーがあって，そのあいだに官庁のあいだを走りまわり，あとの時間はボヤーッとしている以外にない。バスその他の交通機関はあっても，終戦後の日本の交通事情とかわらず，そしてリンタクのベチヤを乗り廻すのにはジャカルタの町は，あまりにも広い。この状況に適応するためには，われわれには，いささかの努力を要する。翌日の予定を立ててはならないので，次になすべきことの順序だけを立てておく。それがいつ実現するかは，アラーの神のおぼしめしである。ここでも，甲斐さんに，さんざんご厄介になった。忙しい時間をさいて，我々の希望をきいていただき，車を借用したので要路の折衝がうまく，思うよりも早く解決していった。ジャワ島のうち，比較的 dry な東部ジャワを割愛することとし，7月のうちに西部ジャワの各地を調査，いったんジャカルタにかえってから，森林省のゲストとして中部ジャワの調査を行なう。それを正味10日間として，8月中間以降は，次の行動を考えよう。そうすれば，治安上の問題の多い地域も，うまくカバー出来るうえに，森林省からジープを提供してやるとのこと，まことに，願ったりかなったりの話である。

Hotel Indonesia のマネージャーと戦いをまじえる。Hotel に専属のタクシーがある。タクシーといっても，ドライバーぐるみで，時間制で借り上げるので，さもなければ帰りの途が確保されない。それが予約でいつもフルに働いているのを，とにかく1週間借り上げることにした。1日に7ドルの約束である。オンボロの Mercedes-Benz，それでも，とにかく走る。マネージャーはジャカルタ—バンドン（Bandung）の国道1号線に限ると条件をつけたが，これはドライバーとの話合いで，何とでもなるだろう。滞在すでに2カ年に近い言語学の崎山君の同行を得て，7月16日の朝まだきに，ジャカルタをあとにする。ボゴール（Bogor）街道に，低オクタンの燃料のエンジン・ノッキングの音をひびかせながら。

ボゴールとバンドン

サラ火山（G. Salak）が聳えている。このあたりの火山性の台地をチサダネ河（Tjisadane）が解析している。その残丘をしきって，広大な森林が自然公園として保護されている。ジャカルタに面した部分は大統領の官邸にあてられ，白亜の館が見える。たくさんのシカがいる。在留日本人は奈良の鹿だと思っているが，それは4頭だけで，大部分はインドジカである。残りの広大な部分はオランダ時代からのボイデンゾルグ植物園で，ここを中心にして研究機関が集まっている。インドネシア大学はジャカルタにあって，ここにはその農学部があったが，先年独立して，生物学中心の大学となった。植物園長が，同時にその management をとりしきっているらしい。それと並行して，学術会議にあたるものがある。長は Prof. Kamto Utomo，アメリカ仕込みの人類社会学者である。この人が，センター関係との当面の対手になる。酒井君の研究分野から，この人や，農業地理の教授を歴訪する。例によって，時間のロス，はなはだしい。幸にもこん

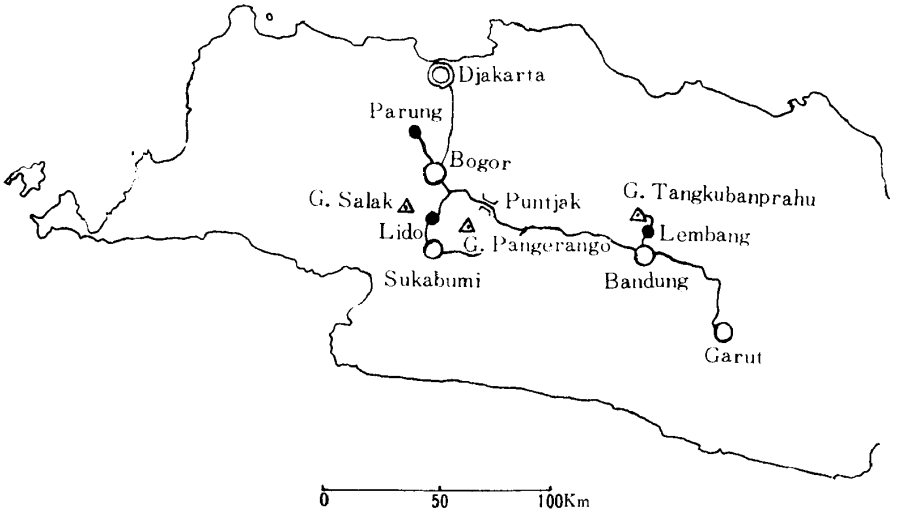

図1　西部ジャワ

どは足があるので，ボゴールの町なかを走りまわる。植物園と，その周辺は，第1回のときに資料を集めているので，今度は問題にしない。3カ月あまりの滞在ののち，バンドンに向う。ジャワは火山の島ではあるが，やはり脊稜山脈が東西にのびている。バンドン盆地にこえるところがプンチャ（Puntjak）峠—はるかに北部平原を見はるかす壮大な眺めがある。このあたり，エステートの名残りの茶園が広がっているが，茶樹そのものも古く，どうも管理が集中的でないように見うけられる。宇治にくらべてはいけないが，マレーのカメルン高原とならば比較してもいいだろう。峠の近くには，オランダ時代からの館が多い。気候もジャカルタとは比べものにならない。それが，今は政府高官の邸宅ときく。何のことはない，日本ならば鎌倉や，箱根にあたるのであろう。峠の茶屋は満員，ここの湯麺はうまかった。そして石灰岩地を通ってバンドンにつく。この辺には洞穴が多い。グア・パワン（Gua Pawan）というのをのぞいてみる。大したものではなかったが，100m くらいの延長である。洞穴生物を見つける。

何やらの会議があるとのことで，AA 会議のあったあたり，ホテルはすべて満員。これはジャカルタを出るときから聞いていた。およそホテルらしいものは，政府関係でいっぱいで，入り込めない。客桟のようなものでガマンしなさい。私はジャワへ遊覧に出かけたわけでない。デラックス・ホテルに泊りたければ，何もジャワに来なくても，東京で結構たのしめる。いささか，最初のうちは気持のよくなかった木賃ホテルも，蚊には抗マラリヤ剤をのみ，南京虫の夜襲のためには，サロンを寝袋状に加工して，BHC を散布して OK，むしろ，この方が好都合であり，便利なことが多かった。床の上を資料整理でゴタゴタしても，気がねしなくてすむ。この状況は中部ジャワでも同じであった。

バンドンの町では仕事にならない。ドライバーと相談して，町外れのルンバン（Lembang）の村にゆく。それからグノン・タンクバンプラフ山（G. Tangkubanprahu）という，長ったらしい山にポイントをおく。ドライブウェーが，2,000m の頂上の近くまである。まずは伊吹というところであるが，頂上には火口があり，噴煙をつづけている。登るにしたがって，植生が変ってゆく。はじめは Pinus が多かった。それがナギ Agathis に変り，下生えにシダが多くなる。頂上附近では，また様子がかわって，ウバメガシの類が出てくる。このような高度変化に相応して，林床の生物も変ると思われるので，それをおさえながら，登り，降りる。ジャワの調査は現場ではわりあいに楽である。

バンドンにかえりつき，エマヌエル病院に梅山猛博士を訪う。夫人のご好意の日本食をいただく。幼稚園を開いておられる。日本に帰っていたあいだ，お手伝いの人にまかせておいたら，そのあいだ，おなじひとつの遊戯しかやっていなかったとのこと。そんなに楽しいところである。バンドンの東，ガル（Garut）にゆく。ここも火山に周囲をかこまれた盆地であった。

帰途を西にとり，印度洋側にまで出たかった。プラブハンツ・ラツ（Prabhantu Ratu）には大林組がビーチ・ホテルをつくっているというので，そのあたりの資料がほしかった。スカブミ（Sukabumi）まで来ると，ドライバーが心配しだした。オンボロのベンツでは心もとない。ジープでないと，シャフトを折ってしまいそうだ。事実，このジャワ島内に関するかぎり，道路網はたいへんよく発達している。山間部にまで，立派なハイウェーが通じている。そして，人口の密である加減もあって，村落が多いし，人家の見えないところは少ないくらいである。残念なことには，戦後の日本とおなじように，補修が十分でない。広い道路と，大きなアナボコでは，ジープが蛇行して，パチンコのタマのような走法をやる。ハンドルを切りちがえてアナボコに入れば，大ショックである。普通の自動車では，一巻のおわりになる。その一巻のおわりが，街道すじの所々に見られた。スカブミは静かな眠ったような町の印象であった。京都に留学中のサヌシ君の家を訪れて，タピオカだんごをごちそうになる。それから中央山地帯の西側をこえてチボゴン（Tjibogong）湖畔のリド（Lido）に泊る。なだらかな斜面に段々畑の水田がひらけている。酒井君がしきりに写真にしている。

ボゴールに再来，先日不在だった教授と教室を訪う。またジャカルタにもどって来たのが7月28日であった。

中部ジャワへ

研究の関係で出発のおくれた今立君をむかえて，中部ジャワに発進する。7月30日午前8時30分とガルーダ航空にブッキングはしてあるが，飛行場には6時に行くべし，従ってホテルは5時に出るべし，タクシーは前夜に約束のこと，それでフライトがキャンセルされれば，帰りの足はありません，とのこと。幸にしてエレクトラは飛び立ってくれたので，1時間でスマラン（Semarang）についてしまった。雲海の上をとぶ。富士山型の3,000m クラスの山々が，雲海をかぶって，ニョキニョキと並んでいる。チュルマ山（G. Tjerme），スラマット山（G. Slamet），プラフ山（G. Prahu），スンドロ山（G. Sundoro），スンビン山（G. Sumbin）と，送迎にいとまがない。やがて機が低くなり，ジャワ海の海岸線がみえだした。何やら，海岸に近く，人工が加えられている。あとで判明したことだが，それは，マングローブ林をしきり，海岸に土手をきずいて，養魚をしているのであった。

湿地のある草っぱらに，ほうり出された。資料採集の器具といっしょに，とにかく待合室にはいる。今日の到着は知らせてあったが，もちろんお迎えが来ているとは予想していなかった。ある意味では非常事態のさなかにあるジャワで，それほど甘い考え方をしてはいないが，さて，実際にポイとほうり出されてみると，いささか途方にくれた。野っぱらにフォードのボンコ

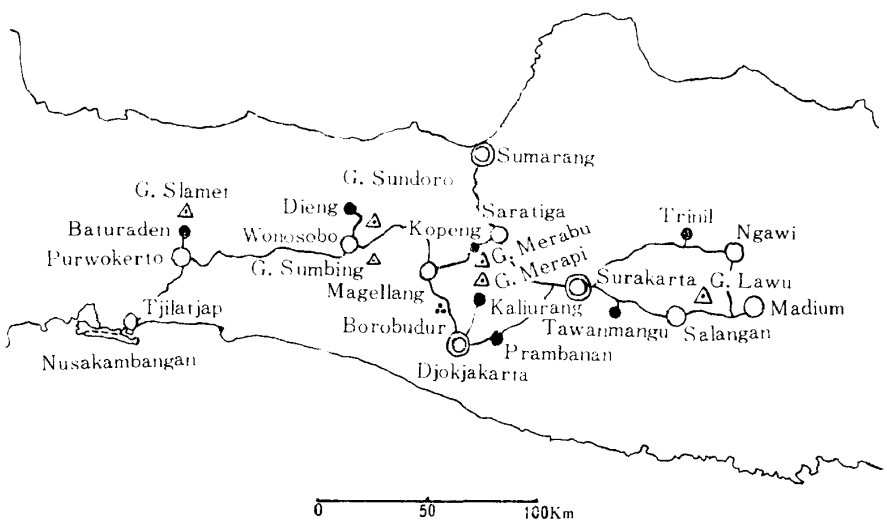

図2　中部ジャワ

ツが野ざらしになっている。ガラスの部分はみんななくなり，赤さびた金属部分が目立つ。ところが，この車にドライバーがついていて，動くのである。ただ法外の金額ではあったが，とにかくホテルに行く。4度目のホテルで，ようやく部屋がとれた。もちろん，デラックスでない。しかしジャワ気分が横溢している。中庭にはサテ（やきとり）売りがいて，よろしい。このホテルで4日ねばる。附近の"めし"やを食いあるく。水雞（かえる）など，安くてうまい。南京虫は，どういうことか，酒井君にだけはたからなかった。このHotel Tjiremojiはなかなかの傑作であった。Policeにあいさつに行く。署長が面会する。これもアメリカで仕込まれ，東京に3日泊ったという。≪お話はよくわかった。省のお客ならば，それで旅行し，調査されることに異存はない。ただし，それは，その範囲での許可であって，それ以外の行動については許可できない。特に中部ジャワは美人が多いので，この点は重ねて注意されたい≫と，にやにやしている。≪いや私はもう老体であるので≫というと≪その老体がもっとも危険である≫という。よほど≪東京の夜≫がお気にめしたらしい。このあたりから，私はジャカルタではわからなかった本当のジャワとぶつかりはじめた。

スマランの附近を歩いて資料をかせぐ。郊外には小高い丘がある。附近で林のなかをほじくっていると，農民が出てくる。子供たちが見物する。案内係が農民と話し合って大いに笑っている。何事かときいたら，また笑った。≪この日本人は何であるか≫≪彼は京都大学の生物学の教授であって調査のために来たのである≫≪彼の年齢はいくつであるか≫≪およそ40歳と推定できる≫≪しからば戦時中は20歳前後であったと思われるが，調査とは名目だけのことであって，実際には，戦争のときに当地に進駐し，ジャワの女性とのあいだに残した第2世に面会に来たのではないか≫これだけの豊かな想像力を，ただの農民が持っていること，それがジョークとして，日常に使われていること，それが私にはおどろくべきことに思われた。おなじ，マレー人であるとしても，これはマレー半島とはたいへんな差である。このようなパターンはタイにもなかった。カンボジアにもなかった。いく分はフィリピンにあったが，ジャバの方がはるかに洗練されている。この原因が文化的な伝統によることを，後日知らされた次第である。夜，ホテルの近くの映画館にゆく。日本映画≪夜の闘魚≫が看板ではYuroになっていた。この町としては2流以下の館らしいが，それでもシートがみんな指定席になっている。日本の場末の映画館よりは，はるかに上品なムードである。

8月2日　トヨタのジープの新品を提供される。この車は昨夜おそくスラバヤ（Surabaya）から帰ったばかり，そして私たちに14日まで使用を予定され，そのあと，すぐに他の目的に使うという。国内の輸送事情が極度に切迫している証拠である。私たちの使用も，省としては，かなりの破格のものらしい。

スマランから南下してサラティガ（Saratiga）につく。ここから，同行の案内係がふたり乗り込んでくる。ひとりは最近までカリマンタン（Kalimantan）におり，ササヤップ川（S. Sasajap）の伐木事業所で働いていたという。ときどき日本語が出たり，そのときに日本人からもらったユカタを着たりする。私はバティックのサロンが気に入って，それを着用していると，妙な風景になる。もうひとりは，おっとりした，言葉数は少ないが親切な男，サラティガの署長を大政に，カリマンタンを小政にして，もうひとりを石松さんと呼ぶことにした。サラティガからクペン（Kopeng）にゆく。ここはムラブ山（G. Merabu）（3142m）の麓である。街道の両縁には，めずらしく糸杉が植えられている。ゴッホの画によく出てくるヒョロ長い樹のたたずまいと，そのバックに聳える火山の姿は，私には南伊やスペインの風景を思いおこさせた。住んでいる人たちの気質も，多分に通じるところがある。ムラブ火山は木曽の御岳のようであった。クペンには立派なホテルがあり，バンガローがある。周囲の林はふかく，ここで，はじめて中部ジャワの自然に接する。このあたり，渓流の水はすんでいて，東南アジアとしてはめずらしい。プラナリアがすんでいる。ジャワのプラナリアはめずらしくて，やがて報告は出るであろうが，地理的にも，特に重要なものと思う。今立君は土壌のサンプリングをはじめる。

峠を越えて，マグラン（Magellang）に出る。小都会である。華僑が多い。北行してパラカン（Parakan）を通り，スンドロ山（3,135m），スンビン山（3,371m）とのあいだの峠をこえて，ウォノソボ（Wonosobo）の町についた。ゴミゴミしたバザーをはじめて見る。営林署長は親切だった。私たちをディエン（Dieng）

高原に案内するという。ジープは人と荷物でぎっしりになった。急坂をのぼり，高度をつめてゆく。土地の利用が行きとどいていて，ここではジャワの高地農業がみられる。山の斜面にはムシヨケギクの白い花が満開であった。ディエン高原は2,093 m。火山活動によって谷がせきとめられて出来た高原であるので，地形の上からは尾瀬ケ原の形状にちかい。だだっ広い原の中央には湿原に囲まれた池があり，村落は原の周辺に点在している。ここには古いヒンズー寺院の遺跡が点在し，9世紀のものという。おそまつなゲスト・ハウスであったが，このディエン高原は私のジャワにおけるひとつの夢であった。十分に資料をとる。夜は寒かった。10°Cというから，日本でならば大したこともないが，小政，石松の両氏はふるえ上って，ひと夜まんじりともせずに木炭のコンロにかじりついていた。恐らくは生れてはじめての寒さであったろう。ジャガイモ畑があり，そのあいだにソラマメが作られている。遠くにはナタネや，キャベツの畑がみえる。麦の穂が青い。村にはやたらに少年，少女が多かった。おいおいに判ったことは，このあたりは，桃源境とでもいう特殊な社会があり，ジャワのなかでも早婚であるという。男子は15歳，女子は13歳くらいで結婚するというから，子供の多いのも当然であろうし，生活程度に差のあることも考えられる。また急坂をウォノソボにくだる。先日の大政氏が私たちの行動を心配して，見に来てくれた。ディエンに行ったというので，安心して帰っていった。このあたり，ジャワでは難所のひとつなのであろう。

西へ走り，プルウォクルト（Purwo Kerto）に達する。スラマット山（3,428 m）がそびえている。このあたり，ジャワの森林地帯の中心らしい。山腹の保養地バツラデン（Baturaden）のゲストハウスに泊る。このあたり，ナギ（Agathis）の植林がある。目下，林道を開いている途中ではあったが，立派な材である。ただし，材質は良くない。成育は早いらしいが。ここでも資料を集めるのにはこと欠かなかった。スラマット附近はジャワでは最多雨の地とのこと，山ビルが多いのには閉口する。附近には湯がわき出している。いささかの伝説があるやに聞いた。ここからスラマットの頂上までは2日の行程という。登頂したいのを我慢して，予定日をまもる。南行して，印度洋岸の港町チラチャップ（Tjilatjap）に達する。ひどい道であった。

ヌサカンバンガン

チラチャップの港には小さなタンカーが浮んでいた。印度洋側の唯一の港である。大戦のときは，ここが東洋のダンケルクであったという。日本空軍がここから撤退するオランダ軍を徹底的にやっつけたらしい。町の駅は，いまでも仮舎である。港は海峡に面していて，その対岸はヌサカンバンガン（Nusakambangan）島である。海峡には，終戦後20年の今もなお船艦が3隻，座礁したまま赤さびている。

軍港でもあるので，港湾司令部に挨拶にゆく。若い海軍服の士官が，日本人とわかってから，急にうやうやしくなった。目の前にオランダとイギリスのフリゲート艦が沈んでいるのだから，これは正直なところ，こわもての感があった。

ジャワ本島はところどころに自然林が保護されている。それを私たちはたどって来たのであった。しかし熱帯の低地林はなかった。それがこのヌサカンバンガンの一角にある。全体としては淡路島の半ばくらいの面積であるが，その西半分は原生林のままであり，まだトラや，サイが野生し，寄生植物のラッフレシアが花咲く，といったことを読んでいた私には，ここが夢の島でもあった。現実に行ってみると，そこは要塞地帯である。許可をもらって渡ってみると，何となく様子がおかしい。≪ここには女がいない≫などと石松氏がいいだす。小政氏はどうも緊張しているらしい。ジープ道のターミナルにつくと，兵営のようなものが現われた。何のことはない，ここはジャワ全島の流刑の地，それも，特に政治犯の徒刑の島であった。刑務所はこの島に7つあるという。その1つにつく。所長さんが出て来る。すこしも暗いところのない，でっぷりしたオヤジである。≪日本人がこんなところまで来るとは思わなかった≫と，お愛想のような，本心のような，とにかく，悦んでいることだけは確かであった。家族とも仲良くなる。

さて，原始林地帯への道程が大変なことになった。ゾロゾロと集合したのが15人，うち，日本人2人，警官が10人と，囚人が3名。ゴムのプランテーションをぬけていくと，いよいよ低地林になる。フタバガキ科の大木が出現し，下生えのあいだから，ミョウガ科の黄と赤の毒々しい原色の花などが現われてくる。しずま

りかえった林のなかに，渓流があって，滝がかかり，深い淵になっている。昼近くには開墾地に出た。キャツサバの畑がある。囚人はここで働いている。歩くのはあまり有難くないとみえて，このあたりから同行者の数が減ってきた。いったん海岸にでる。印度洋の波が砂丘の向うにうなっていた。ハマユウが咲いている砂丘を通りぬけ，それから東側の岬に向う。小さい川を渡渉し，岬から山の中にはいったところが，私たちの目的地であった。暑い。たいていの連中が落伍して，私と今立君と，その他には同行者がふたり。今まで気付かなかったが，そのふたり，いずれも囚人服である。下枝をはらうのに，山刀のデッカイのをつけている。このあたり，まったくの密林であって，すこしでも横道にそれると，見通しは全然ない。何のための警官の同行かわからないではないか。その囚人のひとりはいろいろ話しかけてくる。もう，この島に13年いる。もう3年すれば刑期をおわって出られる。刑務所のなかでは，こんなことがある，など。その男は林にくわしかった。≪ラッフレシアの花は白いのや，赤いのがあり，12月ごろに咲く，このあたりに多い≫などといった。私たちの資料は，この日にたいへん豊富になった。休憩していると30分ほどおくれて警官のひとりが，追い付いてきた。誰かに指図されたらしい。気の毒にイキを切らしている。昼食にしたら，さすがに囚人の2人はものすごい食欲であった。夕方近くまで，ゆっくり帰る。私はおくれて，ひとりジャングルの中をあるいてみた。連日の強行軍でかなり神経がバテていたが，今日は暑い。渓流でマンディをする。たくさんのエビが集まってきた。サルが樹の間がくれに見えた。もうすこし，私が若ければ，ターザンの真似ごともできたとおもう。あとで聞けば，ここにも10mくらいの蛇は出て来ることがあるという。このヌサカンバンガンに渡ったことが知れて，後日ジャカルタの在留邦人のジャワ通のなかまで評判になっていたとのこと。大したことではなかったが，ジャワでは，いちど可能であったことが，次の期には不可能になり，またその逆の場合もある。由来コンスタントな計画の立たないところが面白い。いよいよこのあたり地中海的である。

ソロ・ジョクジャカルタ

街道をもういちど逆行する。ウォノソボ，マグラン，その他，各地の営林分署に挨拶をしながら行く。夕方ボロブドゥル（Borobudur）についた。生物学とは関係のないところではあるが，まず塔にのぼる。バンコックの寺院にくらべると，想像していたよりも小さかったが，はるかにムラピ山（G. Merapi）を眺める風景は壮大である。このあたり，モクマオウ（Casuarina）の植林がみられる。

ムラピ山（2,911 m）はすばらしい。山容には急斜面の露出地もあって，ゆるやかな噴煙が眺められる。いくたびか登りたくなった。山麓のカリウラン（Kaliurang）のバンガローでは花咲く庭に，周囲の山中では渓流にそって歩きつつ，熱帯の美しさに満足する。ケープタウンの郊外で，はじめて Kirstenbosch の植物園を訪れたときの感激に似たものがあった。

ひと夜，プランバナン（Prambanang）にワイヤンを見物。月明の夜，野外舞台が，ヒンズー寺院をバックにして設けられ，ガメランの打楽器を伴奏にして行なわれたラーマーヤナの物語りに，インドネシアにはまだ私の知らない面があることを思い知らされた。私にはもちろん深いことは判らない。その劇の由来も，内容も，また音楽の構成分析もできない。しかし，この民衆芸術，その踊り手の大部分が，ジョクジャカルタ（Djokjakarta）のガジャマダ大学の女子学生であるというこの舞踊劇は，私の予期していた田舎芝居ではなかった。日本のいろいろの伝統的な芸術，それに壮大さと，将来性を加えなければこの域には達しないと思われた。翌日，ジョクジャカルタ（略して Jogja）にガジャマダ大学を訪れる。Prof. Iso その他の社会学関係は酒井君にまかせ，Prof. Indrojono（昆虫学），Prof. Jacob（洞穴生物）その他の人たちと語る。ここはジャカルタではない。ここにはジャワの伝統がある。大学そのものは貧弱であり，予算的にはジャカルタに及ばないとしても，この大学には自信がある。事実，学問上の業績からみて，立派な学問の伝統があることを，後日いろいろの方々から聞かされたことであった。ジャカルタを東京とするならば，ここは京都大学であった。

さらに旅をかさねる。ソロ（Solo）の町の東に聳えるラウー山（G. Lawu）（3,265m）に行く。ここにも保養地タワンマングー（Tawangmangu）があり，サランガン（Salangan）がある。それらのゲストハウスに泊りマディウム（Madium），ンガウィ（Ngawi）と，

東ジャワにはいる。ジャワ島は東部に向って dry になり，ついにはサバンナ気候が出現すると聞いた通り，このあたりは乾燥していた。甘蔗畑のつづき，竹林の多い丘陵地帯をソロ川の川床が侵蝕している。その川ぞいにだけ，河岸林がある。ジャワ猿人の化石の産地トリニール（Trinil）は，そんなところであった。あまりにも貧しい自然，河岸の土のあいだに深い穴がほってあって，村の少女がツボをかつぎ，その穴から水を運んでいた。資料集めに努力しながら，私はまたジャワの他の面を見せられた。8月13日，私たちは予定の通りスマランに帰着した。

こんどのスマランではいろいろの目にあった。省からの手配ができていたので，私たちは丘の上の特上のホテルに泊ることになった。そうすると，食堂はなかった。時間のたびに，ボーイに言いつけて食事を調製させた。夜はとうとう電燈がつかなかった。しかし，蚊も南京虫も出て来なかった。

翌日は省と，警察に挨拶にゆく。もうトヨタのジープは他の目的に使用されている。そして，ジャカルタに行く汽車も，航空機も，キャンセルされて，1週間以上待たねばならないという。私たちは，もう省のゲストではない。バザーにゆく。石松君がハイヤーとはなしあう。ところで，彼はおとなしすぎる。フィガロの如き人物が出現して，うまく話しをまとめると，いささか法外の額ではあったが，ジョクジャに行くハイヤーがあった。夕暮れの路をとばし，もういちどこの中世の町へ，そこでホテルのボーイを口説いて，その日の夜行に乗りこんだ。ごまかしたのが当方か，ボーイか，ともかく，翌日の10時，ジャカルタについて，ホテルから電話すると，みんながあきれていた。ジャワを予定の通り旅行して，予定通りに帰って来るなど，奇跡だとのことである。しかも大学の先生がネー，というのである。

奇跡のあとが悪かった，インドネシア建国祭にぶつかってしまった。日本からは川島特使，花柳なにがし，それに日大ブラスバンドまでやってくる。大使館も忙しい。インドネシア側も忙しい。あきらめて，ボゴールに行く。今立君はパングランゴ山（G. Pangerango）（3,022m）に登る。酒井君は農村をチョイと見てくるという。私はいろいろ考えてみた。行きたいところはたくさんあった。イリアン（Irian）経由で帰国というルートも考えてみた。いずれも不可能であることが本当にわかるまで1週間かかった。私に欠けていたものは時間であった。ジャワ島以外を考えるのならば，それだけで2，3カ月，できることならば6カ月以上の予定を組まねばならないことが身にしみた。それだけの時間をかける価値のあることも。

このたびのジャワ旅行で，52地点の資料が得られた。まずは及第であったとは思うものの，あまりほめられた旅行ではなかった。ネシア語でネシア人と語り合うまでに半カ月以上かかっている。ひとつには崎山君に前半をオンブしたためではあっても，私としたことが，まことにシマらない話だと思った。もっと地についたやり方，たとえばジープが入手できない，航空機が使えないのならば，サイクリングするとか，ジャンクを利用するといった方法があったのではないか。まずは，インドネシアの1年生のこととして，ご海容いただきたい。

インドネシアの国情は，これからもいろいろと変遷することであろう。あるときは右に，あるときは左に，めまぐるしい転換もおこるかも知れない。しかし，この国民性と，この風土性の変らないかぎり，日本と，インドネシアのあいだには，つねに1本の糸が張られていて，その糸はたち切られることは考えられない。政治・経済の面での交代に一喜一憂することなく，少なくとも自然科学の面では，永続的の関係を持続させることが出来る。ボゴールの博物館から出版されている Treubia は，オランダ時代からの，生物関係の最も重要な雑誌であるが，それは国情の不安な現在でも刊行されており，つい最近にも，私の論文のゲラ刷りがやって来たところである。今後ともに，東南アジアの主要部分であるこの国との学術交流を盛んにして，ホーム・グラウンドとして，この国を眺めたいものである。

末尾ながら，今回の旅行について，一方ならずご配慮をいただいた斎藤大使，甲斐書記官，寺田書記官，カリマンタン開発の山本，丸山両氏，豊島中氏その他の方々に厚くお礼申し上げます。